第三回　島根大学ホームカミングデー（開学六〇周年記念大会）

教育学部同窓会企画

ラウンドテーブル（軽食と喫茶付き）

「育ち」を支えるネットワーク

二〇〇九年一〇月三日（土）、島根大学教育学部五階多目的ホールにおいて、第三回島根大学ホームカミングデーの教育学部同窓会企画として、ラウンドテーブル『『育ち』を支えるネットワーク」が開催されました。最初に、パネラーから学校や大学における事例報告、背景分析、問題点の指摘が行われた後、各テーブルでサンドウィッチをつまみながらのフリートークを行いました。続いて、出席者から、問題提起や活動報告など多くの発言があり、活発な意見交換の場となりました。

パネリスト

河田　充　氏　米子市美保中学校教諭

高多宏樹　氏　米子市福米中学校教諭

高見友理　氏　島根大学教育学部講師

三鴨朋子　氏　島根大学教育学部特任講師

コーディネーター

三宅理子　氏　教育学部准教授

田中瑩一同窓会長　今日は六五名の方に参加のお申し込みをいただきました。司会は三宅先生にお願いしております。パネラーの方にご発言をいただいた後、サンドウィッチを用意しておりますので、そちらも楽しんでいただきたいと思います。

最近、「子どもの居場所」ということが言われるようになりました。私ども同窓会の構成員は、教育の専門的な教養を身につけて世の中に出ているわけですので、そのノウハウを生かしてネットワークを作っておこうというのが趣旨でございます。ただし、あまり堅苦しくならないよう、気楽にご参加いただければと思っております。

三宅氏　私は、教育学部心理・発達臨床講座の三宅と申します。本日は、『『育ち』を支えるネットワーク」というテーマをご提示いただきました。私は臨床心理士として、地域や学校、さまざまなネットワークの一員になれていればいいなという思いを持っております。私自身は、常日頃の臨床を振り返る機会にさせていただければという思いから、コーディネーターをお引き受けいたしました。本日は、パネラーの方々にそれぞれのお立場で考えていらっしゃる「ネットワーク」についてお話しいただけることを楽しみにしております。では、パネラーにバトンを繋いでいきたいと思います。

河田氏　私は、米子市の美保中学校から参りました。現在、三年生の学年主任をしております。昨日学校で授業も終わり、さて明日は何をしゃべろうかと考えていたところ、生徒の保護者から「子ども

の持ち物が学校でなくなった」という電話がかかってきて、結局それから三時間、対応に追われてしまい、しゃべることも考えられないままここに来ました。まとまらない話をする言い訳ですが、今の学校現場の実際を示す一例としてお話ししました。

さて、私は二〇〇四年から島根大学大学院で臨床心理を学びました。一年目は現場を離れ、二年目は現場に戻って修士課程を過ごしました。大学院に入った理由は、四〇歳を越えていき詰まっていたから、といえばいいでしょうか。たとえば、学校で女の子のグループの中心メンバーが、ある日突然一人ぼっちで昼食をとり、明くる日には学校に来ない、といったことが起こります。ジェットコースターのような人間関係の変化、携帯電話によるあっという間の情報の拡散、といった学校現場の現実に、どう関わるのか悩んでいたといえるかもしれません。そんな折、隣にお座りの高多先生が大学院に入っておられ、その話を聞きました。それまでとは違う角度からものが見られるようになるのではないかとの思いから、進学したわけです。

大学院を終え現場に戻ると、一年生の主任になりました。ただし、大学院で学んだことは、最初の一、二年は活かせませんでした。たとえば、ＡＤＨＤの診断を受けている子が入学してきて、学校内でずっと棒を持って手放さないわけです。そのとき、現場の教員としては、他の生徒に危害が及ばないように棒を取り上げること考えなければならない。しかし、臨床心理的には、棒を持つことの意味を考えてしまったりする。彼にとって棒が守りの役割を果たしているのではないか？などと…。そんな状態で私自身が内面で葛藤し、かなり追い込まれたこともあります。しかし、徐々に現場の教員としての立場と臨床心理的な立場とを、別々のことではないと考えられるようになりました。

さて、本日のテーマに即して、一つの事例をお話ししたいと思います。受け持った学年で不登校になった女の子がいました。学校では、担任はもちろん、部活動の先生、その子が話しやすい女性の先生などが関わりました。その子は、「いじめられる」というか、からかいの対象になっている子でした。その子自身、ずっと頑張っていたのですが、だんだんからかいがひどくなったのです。そこで、スクールカウンセラーが話を聞くようになると、その子は学校でのことではなく、家の不満を言うわけです。例えば、お母さんもお父さんも下のきょうだいにかかりっきりで、自分ばかりにいろんなことを言いつける…などというようなことです。つまり、家でも学校でも、その子が「穴」（私のイメージですが…）ででもあるかのように、皆があれこれ投げ込んでいたわけです。誰かがこの子にしっかり向き合い話を聞いてやることが必要だと感じました。そのうち学校にまったく来なくなり、県教委が主宰する不登校支援の教室を紹介すると、そこに通い始めました。しかし、だんだんそこにも通えなくなり、

島根大学教育学部の「こころとそだちの相談室」を紹介すると、母親と一緒に通うようになりました。毎週一回熱心に通い、中学校に

は来られませんでしたが、高校受験し、高校には通えています。これは、学校だけでは解決できないことを、地域や大学とのネットワークを活かして良い方向に持っていけた例だと思います。

教員というのは、目の前の問題に対して自分で何とかしようとする傾向が強いのですが、私の場合、島根大学に来ることで、目を開かせてもらえることがあると思っています。

高多氏　私は、河田先生と同じ米子市の、福米中学校に勤務しています。私の場合は、二〇〇一年から二年間、島根大学大学院で勉強しました。当時は、「こころとそだちの相談室」ができたばかりで、毎週のようにお母さん方の話を聞く機会を持ちました。現場ではそれほどの頻度でお母さん方の話を聞く機会はありませんので、とても良い経験になりました。

さて、本日のテーマに沿って、二つのケースを紹介したいと思います。まず、「ネットワーク」に関わるケースです。ある日、発熱した生徒がいたのですが、母親と連絡が取れないということがありました。しかし、母子家庭のため他に連絡できるところがありません。また、連絡が取れ、連れて帰ってもらっても、病院に連れて行ってもらえないのではないか、とも考えられました。最近は、そういう事例が増えています。実際、連絡が取れた時、母親は「しんどくて連れて行けない」とのことでした。そこで市の福祉関係の係の方に連絡し、市の協力を得て、市の職員と私とで病院に連れて行くことができました。最近は、学校と行政、スクールカウンセラー、病院、といったネットワークがどんどん出来始めています。こういうネットワークは、強くしていかなくてはなりません。

さらにこの子には別のネットワークもあります。この子は、近所のおじいさんと知り合い、時々その家に遊びに行っています。家では、庭掃除をしたり、たき火をして遊んだりしているのだそうです。ある時「書を書いてもらった」と言って、漢詩を持ってきたこともありました。母子家庭でおじいさんがないこの子の場合、このおじいさんと知り合えたことや、家庭生活にはない文化と接することが大きなプラスになっています。地域のネットワークの中で、声をかけてもらって育っている子どももたくさんいるということです。

さて、二つ目のケースにいく前に、教員が親御さんと話す場合に大切な、「育ちのイメージを共有すること」について考えてみます。皆さんは、子どものどんな姿に成長の喜びを感じられるでしょうか。イメージしてみてください。子どもが幼少の頃は、「歩くようになったら、話すようになったら嬉しいだろう。」とか、あるいは二十歳位なら、「一緒に酒が飲めると嬉しいだろう。」といった、育ちのイメージを持っておられると思います。しかし、中学校年代の場合、育ちのイメージを見つけることが、実は難しいのです。たいていの場合子どもが思春期の親の喜びは、「勉強の成績が良くて嬉しい」「部活で活躍できて嬉しい」ということになります。しかしそれは、子どもの絶対的な成長に対しての喜びではなく、他と比較した喜びです。親と教員の間で、成績や他者との比較から離れて「この子が育って嬉しい」というイメージを共有することは大切なことです。

ここでお話しするのが二つ目のケースです。ある不登校気味の男の子は、神経質で潔癖でした。不登校になった子どもの場合、勉強や部活での成長が目に見えるわけではないですから、何をもって成長と認めるのか、どうなったら喜べばいいのか、親御さんが、見失ってしまわれていることがよくあります。このケースでは、スクールカウンセラーの先生に、お母さんとの関わりを持って頂きました。ある時、その子が友達と海岸で遊んでいるときに、砂のついたものを食べたということを、お母さんが話されました。ほんの些細な出来事に見えますが、この生徒にとっては、成長の重要なターニングポイントでした。カウンセラーの関わりがなければ、このことに気づき、皆でこのことを喜び合うことはできなかったと思います。見つけられなかったかもしれない育ちの喜び感じることで、子どもの変化のきっかけをつかむことができました。現在の学校は、本当にいろんな人の支えで成り立っているのだと思います。

高見氏　私は三宅先生と同じ教育学部に所属し、「こころとそだちの相談室」でカウンセラーをしている他、学内外で仕事をしています。ここでは、「育ちを支える」というテーマに沿い、大学の相談室で受けている相談の事例を紹介します。私は、コンサルテーションといって、先生方や保護者の方、つまりどんな風に子どもを支えていったらいいのかと考えている人を支える、という仕事もしているのですが、そこにいらっしゃったあるお父さんの話です。

長期間にわたって不登校の状態が続いていた息子さんのことで、ご両親揃って来談されました。余談ですが、一般的に親御さんの相談は母親が来談されることが多く、父親が来られるのは珍しいのですが、それだけに、一層熱意が伝わってくるようでした。息子さんには発達障害の傾向がみられ、息子さんの行動の特徴について一緒に検討するような面接が続きました。その後、息子さん本人も来談されるようになり、息子さんの面接は大学院生が担当しました。紆余曲折を経て、息子さんは自分で再び登校する決意をされ、マイペースながら学校に通っています。お父さんは、息子さんが再び登校を始めたことにうれしさ半分、不安半分、といった面持ちでした。そして、「息子は、浮き輪を持たずに海に浮いていて親が浮力を与えないと沈む、と今までは思っていたが、実際にはそうではなかった」と話されました。また、「あの子にはあの子のペースがある。そして、あの子にはあの子の物差しがある」とおっしゃいます。生活習慣や集団行動の場面において、かなりマイペースな息子さんの様子を見ているとハラハラして、つい、手助けをしようとしてしまっていたご自身に気づかれたようでした。さらに、このお父さんは次のような疑問を話されました。「身近にいる新入社員には、一から一〇まで教えないと何もできない人がいる。一方で、息子のように、こちら側の価値観を教えても息子のためにならない場合もある。先生、教育って何ですか？」と。これの答えを、私は持っていません。一般論では立ちゆかない状況に対して、分からないながらも、その子どもと、親、それぞれの個性にとっての最善な道を個別に考えていく

ことが必要だと思います。親御さんがそれを見出していかれることをお手伝いするのが、カウンセラーの仕事だと考えています。

三宅氏　ここまでのお話をうかがいながら、「育ち」や「成長」は一人ひとり違うということを改めて感じております。では、最後のパネラー三鴨さん、お願いいたします。

三鴨氏　私は、島根大学のほか、スクールカウンセラーとして学校で、また病院でも仕事をしています。その中で、学校の先生とお話ししていると、「子どもがわからない、それで皆困っている」とよく聞きます。私にその答えがあるわけではないのですが、その「わからなさ」はどこからくるのだろう？　と考えます。たとえばそれは、「文脈の読めなさ」ではないかと思うのです。子どもの様子が、「こうなってこうなったから、こうなった」という風に理解できないということではないでしょうか。たとえば、何かを「盗られた」と何度も何度も訴えてくる子がいます。現象として見ると「何で何度も？」と思うような場合でも、繰り返し怒りを訴えてくる。もちろん、自分の感情と納得のいかなさを伝えてきているのですが、それだけでなくその背景には先生方との関わりや何らかのヘルプを求めているように思えます。でも、なぜ訴えは「盗られた」という形を取るのか、それが理解し難かったりするように思います。保護者からの学校の意見等も同じような訴えであることがあるかもしれません。

最近は、何か事件を引き起こすわけでもなく、何も起こっていないのだけれど、「大丈夫かなぁ」と思う子が増えています。たとえば、常に先生に寄ってきて、先生をつかまえては、一方的にものすごくしゃべってくる。先生としては、その子どもとつながるために、どこをキャッチしたらいいのかがわからない。しかし、本当は、日々同じような溢れ出る会話に見えても、絶対にどこか違ってきています。私たちはそこをつかまえたいのです。

一方で、「子どもがわからない」という時の「わかる」ってどういうことだろう？「わからない」ってどういうことだろう？　とも考えます。「わかる」について、心理学の世界では「見立て」というのですが、ある程度の理解する道筋が見えていると、現状が変わらなくても関わる側の気持ちが安定して、関わることができるようになります。また、そこから新たな試行錯誤が可能になり、それによってさらに見立ても変わっていくということがあります。他方、「わからない」について、臨床心理学者である河合隼雄先生の口癖は、「わかりませんなぁ」だったそうです。本当は、わからないことが基本なのかもしれません。

私が実際に関わる中でも、常に子どもの捉えがたさを感じています。面接をしていても、表面的な会話のやりとりにとどまって、なかなか焦点を絞ることが出来ません。関わりの糸口を求めて、少し踏み込んだ質問を投げかけても、わかりきったことしか言わず、進んでいる実感が持てないのです。ただ、この人は会ってくれる人だというのが支えだったようで、担任の先生とも「まずはそこからですかね」と話していました。その後、いろいろな出来事はありなが

らですが、その都度担任の先生と私の間で子どものその時々のテーマをつかまえて共有していることで、何とかその子を支えていけそうな気がしています。これもネットワークかなと思います。

今の学校現場では、ますます濃い連携が必要だと思います。そこには、医療、福祉、地域などなど、幅広いネットワークがあるべきだと思っています。

三宅氏　現在、臨床の仕事は、本当にいろんな人と連携していかなければならなくなっています。それは、学校に限らず、児童相談所や市役所なども含んでです。

では、ここでサンドウィッチをいただいて、後半、それぞれの日常で感じていらっしゃることを、皆さんでざっくばらんにお話しできればと思います。

ここで「軽食&喫茶タイム」テーブルごとに賑やかに会話がはずみました。続いて、フロアからの発言を受けて全体での意見交換が行われました。

石倉國男氏　本日は、『育ち』を支えるネットワーク」というテーマでしたが、パネラーからのお話は特別な支援を必要としているお子さんの事例中心で、私がイメージしてきた話の内容と若干ずれていました。私自身は、退職して暇ができたことから、学校を支える地域活動をやろうとしています。『育ち』を支えるネットワーク」というテーマには、もっと広い内容も含まれているのではないでしょうか。

青木敏章氏　学校現場の中で最も大事なネットワークは、教員同士のネットワークではないかと思います。また、現在、支えを必要としている子どもというのは、特別な子どもだけではない、という気がしています。

三宅氏　今回パネラーの皆様からご紹介いただいたネットワークは、特別に支援を必要としている子どもを支えるためのものが主でしたが、石倉先生がおっしゃるように、「育ち」を支えるネットワークはこのようなものに限らないと思います。現実には、何段階にもわたって張りめぐらされたネットワークの中で、それぞれの段階で支えられている子どもたちがいます。例えば地域のネットワークということでは、市町村が地域の高齢者の協力を得て、子どもたちに昔の遊びを伝えるというような活動を行っているところがあります。また、先ほどフロアの青木先生が、支えを必要としている子どもは特別な子どもだけではないと感じているとご発言くださいましたが、

特別な支援を要する子どもとそうでない子どもとの線引きをせず、児童生徒一人ひとりのニーズにあった支援をという視点から、「生徒指導」と「特別支援」を一つにして「生徒支援」として考え、対応している学校もあります。

高多氏　私の妻は合唱のサークルに入っています。そこでの話題で一番多いのが「子育て」だといいます。社会の中に、仕事ではないネットワークがあり、そこで支えられていることもあるのだと思います。ここにいらっしゃるような教育学部で学んだ方が、仕事のつながりではなく、地域に散らばっていて、それぞれにネットワークを持っている、ということは大切ではないでしょうか。

高見氏　今日のお話には、ネットワークから漏れてしまった例が多かったのですが、本当は私たち自身も、そういう共通した心性を持っているかもしれません。地域のネットワークということでいえば、お母さん方の中には、子どものスポ少や地域のつながりが辛い、という方も多いのです。大人でさえも、うまく関わり合えていない例はあるように思います。

三宅氏　先ほどからお話に出ているとおり、ネットワークから漏れてしまったりそこに馴染めなかったりということがある一方で、子どもや自分のお稽古ごとのつきあいなどでネットワークが出来、そこで支え合っている母親たちもいるのは確かだと思います。

大西俊江氏　今日は、臨床の専門家からいろいろなお話をお聞きでき、とても有意義な時間を過ごせました。地域のネットワークというお話も出ましたが、私の地域でも、子どもの登下校を見守っている老人がいらっしゃいます。そして、その方は、気になる子がいたら学校の先生に言うのだそうです。そんな形で「支え」になることもあるのだと思います。

舟木賢治氏　ネットワークを考えた時、高齢者が良いのは、時間に余裕がある点だと思います。昔はいろいろな世代が繋がっていましたが、今は切れている。その意味で、大西先生のお話は良いお話でした。今は、誰もが忙しく、ゆとりがなくなってしまい、子どもの相手ができていません。一方で、「教育」とは、それぞれに社会適応をさせることだと思います。子ども一人ひとりの課題は異なっているでしょう。先生方も、コンピュータを眺めているのではダメです。ゆっくりとコミュニケートできるような工夫が必要なのだと思います。

蓮岡法暲氏　私は、教員を退職してから、公民館に関係していました。そこで夏休みに子どもたちに書道を教えていたのです。その時に私は、ある子どもに「こら！」と言いました。すると、他の指導員が「こらと言ってはいけない」と言うのです。私は、きっと保護者から突き上げられるので、そういうことを言うのだろうと思います。しかし、「こら！」は、信頼関係の中で使われる言葉です。そういう信頼関係を作ることが大事なのだと思います。今は、学校、先生方が萎縮しているように見えます。元気を出してほしい

と思います。

尾崎豊久氏　私は、現職教員の大学院生です。現在、教師の育ちを支えることが失われているのではないか。若い先生が一人で抱え込んでいることが多いです。今の先生方には、お互いを助け合う余裕がない。今私は、コーディネートの勉強をしていますが、外部とだけでない、内部のコーディネートも大事だと思っています。昔は当たり前にあった関係がなくなっています。学校という組織自体が崩壊しかかっているようにも思います。

石倉氏　現在、学校を支える地域支援本部というものがあります。そこには学校からも提案がなされるのですが、たとえば、学童クラブにも行かず家にいる子どもを地域で面倒みようというようなこともします。学校と地域の連携は、学校を救うことになるでしょう。何かを地域とやろうとすることが、今の先生には負担をかけますが、先々きっと有効になり、先生方の負担を軽減させるはずです。今、私の暮らす地域には、九〇人ぐらい高齢者ボランティアがいて、地域として子どもに挨拶をさせましょう、といった取組をしています。

学校が地域に頼れば、地域には力がたくさんあります。

三宅氏　ありがとうございました。地域にはまだまだたくさんの力が眠っているようですので、そんな力もいただきながら、育ちを支える、そのネットワーク自体が育っていけばいいなと思います。

では、以上でラウンドテーブルを終わらせていただきます。皆様、ありがとうございました。

注　「こころとそだちの相談室」は
(http://www.edu.shimane-u.ac.jp/edu/kokoroto.html)